

幕末期佐賀地方に於ける「カ」語尾

——『滑稽洒落一寸見た夢物語』を中心にして——

一

資料として用いた『滑稽洒落一寸見た夢物語』については、吉町先生が『文学研究』五十二輯に、本の体裁など解説を付されて忠実に翻刻されている。序文末の識語、

干時慶応三ひのと卯弥生下流 案間坊 暮成①

によって、「案間坊暮成」は不明であるが、成立は明らかである。内容は、日峯祭の佐賀市内光景を方言を踊らせて描いた滑稽本であるが、上巻は幕末世相を写して、当時両端を持した佐賀藩の立場を示し、中巻は方言が横溢して郷土方言文学資料となる②。序文に

抑狂言俚語の補綴は軽薄浮虚にして述著威重になき世の人口の責を防禦に術計なく余り好しからざる芸といへども……③

とある通り、この書には佐賀地方の方言が横溢している。上巻にはそれも全く見えないので考察の対照としないが、中巻においては佐

賀藩内の各地のことば（佐賀及びその近郊や北山、武雄有田、諫早）、各階層のことば（役人、侍、医者、書生、田舎者、女）など、一般庶民を中心とする各種各層のことばが浮きぼりにさされて、誠に貴重な資料となっている。

この書を中心にして、幕末期佐賀地方における動詞、助詞、文末助詞については既に述べた④が、今は形容詞などの「カ」語尾の使用について述べることにする。この際殆んど同時代の成立である佐賀方言資料『伊勢道中不案内記』⑤も参考にする。

なお、用例は『一寸見た夢物語』は吉町先生翻刻本、『伊勢道中不案内記』は肥前史談会刊行本によった。(一)内にはその頁数、次にその使用者を示した。また、特に難解な表現にはへゝ内にその意味を記した。

二

現代方言において、いわゆる九州肥筑地方の手形として「良か・「美しか」・「立派か」・「行きたか」の如く用いられる終止連体形のこの「カ」語尾は、『一寸見た夢物語』では、形容詞にあらわれる。形容詞「カ」語尾は『一寸見た夢物語』にすべてで二十七例、会話文に

青^{（や）}うかきれの赤^{（や）}あかきれのテ（五二）北山辺の人

三^{（や）}ツみやアがともな^{（や）}かよふに成^{（や）}った（五四）書生四人連れ

おどんが若^{（や）}カアか頃^{（や）}ア世の中^{（や）}ア賑^{（や）}ふて（五五）武雄有田

是も久しく何事もな^{（や）}かケへ^{（や）}知ぬハ道理なれども（五六）町方老

人

甲乙がめ^{（や）}つたにな^{（や）}かばん（五六）

功者^{（や）}ラットロンシカエ^{（や）}ハット高^{（や）}アかばん（五八）諫早

などと、佐賀及びその周辺、北山辺、武雄有田、諫早の各地方、また書生、老人、功者などあらゆる人達が、形容詞「カ」語尾を用いている。また、やはり『伊勢道中不案内記』でも、

按摩なら按摩といふがよ^{（や）}かたん（一八）重八

こ^{（や）}ぎやアな事アな^{（や）}か、まあづ聞^{（や）}いてく^{（や）}ださい、（二八三）銀作

せ^{（や）}からし^{（や）}かばってん、金^{（や）}の入^{（や）}つとるばん（二二三）久米蔵

もうやがて日暮れぢや。よ^{（や）}か宿^{（や）}に着^{（や）}けてくれ（三一四）愚津

と各人がそれぞれ多く用いている。右の如く、形容詞「カ」語尾は近世もほとんど末期において、佐賀及びその近郊、武雄有田、諫早と佐賀藩内各地のあらゆる人がこれを終止形、連体形「イ」語尾の代りに使用していたことがわかる。更に同時代において、隣接長崎地方でもこの形を用いていた事は『筑紫方言』の記事、

能^{（や）}い^{（や）}所^{（や）}じや 長崎にて よ^{（や）}かるとい^{（や）}へることの略成へし

能^{（や）}い^{（や）}事^{（や）}じや 長崎にて よ^{（や）}かことじや

もうよい／＼など云事をももうよ^{（や）}か／＼と云⑥

小^{（や）}き （私注）長崎にて 又^{（や）}こま^{（や）}か 又^{（や）}ほそいとも

ふ^{（や）}とい^{（や）}こま^{（や）}い （私注）長崎にて ほそいもの （私注）長崎にて 言^{（や）}によりては （私注）長崎にて かも

じにかへて ふ^{（や）}とかもの こま^{（や）}かもの ほそ^{（や）}かものなど云⑦
によって察せられる。なお「……いも言によりては」とあるのが一寸不明であるが、とにかく、一応形容詞は右の如く「カ」語尾をとっていたものと言えるであろう。これは『筑紫方言』の如き内

国資料のみならず、殆んど同時代の長崎を中心とする語を記録した

と思われる諸外国文献、例えば、ラナルド・マクドナルドの『日英語彙』⑧、クルチウスの『日本文典稿』、ホフマンの『日本文典』⑩、ロニの『日本国訛考』⑩や『東語簡要』⑪などに記録されている。なかでも、特にホフマンの『日本文典』の記述、「長崎の俗語は形容詞語尾にカを代用す、かくて白きを白カ」の脚注に引用してある日本語の蘭通事 R. J. Smit Amlaie の書面、

(前略) 形容詞語尾アは事実長崎においては一般に用ひられ居れり、而して下層民はかくせざれば理解せず、少しく教育ある者共は併し此の正しからざる事をよく心得居れり。⑫

よって、この形がいかにも用いられていたかが想像できるであらう。また、この形は『柳川方言河沙』にある用例、

わるかならうはよかごと直してくさし⑬

ほうらつが鯉魚てひろうおらぶ也すつたりせんな一めひもなか
 こんでもない (とやら) (すつかり) (一文) ⑭

くふねつかよかじやなかかんせはらしか借銀乞にぞうのきりわ
 くとい (腹) ⑮

などをみると、柳河地方で江戸中期にやはり極度に自由に使用されていたといえる。隣接地域におけるこれら形容詞「カ」語尾の使用によつても、江戸末期佐賀及びその周辺地域で形容詞「カ」語尾が終止形・連体形「イ」語尾の代りに、いかに自由に使われていたか推測できるであらう。

三

ところで、右の如く形容詞の終止形、連体形が「カ」語尾をとらなかつた事もあつた。それは先述の『筑紫方言』の「いもじも言に

よりては「ホフマンの『日本文典』の「少しく教育ある者共は此の(私注「カ」語尾)正しからざる事をよく心得居れり」などの記述でも考えられる。事実「一寸見た夢物語」には、会話文中に次の諸例が存する。

(イ) イ語尾をとるもの、八例

流石孔子ハ先見が強イ(五四) 書生四人連れ

是ハ成程ヨイ趣向ジヤ(五五) 禅僧

シカタガナイ酒ンバ三匁がとゝ其餅ンバ一式ながら遣リナサイ(五八) 諫早

八) 諫早

ヲツトロシイふてぐわつてナ(五八) 諫早(なお、この形は他に五九・六〇・六二の各頁に一例づつ諫早者が用いている。)

ム、其方悪い事せんと申が(六一) 役人

(ロ) キ語尾をとるもの、七例

下タで見て釣り合あしき上ニ揚て能見ゆるものて御座る故飾り物など拵ゆる時ハ高く置物ハ高き所に置いて(五六) 功者

成程是もよき趣向で景気よろしく見へます(五七) 功者

千本桜の三段目こゝが面白キ見所じや(五七) 使用者不明、在郷の人か

ヤア挑灯に陳幕長ノ字ハまがふ方なき長州長瀬町(六〇) 喧嘩の口上

遠きものハ音にも聞ン近キものは目にイもみよヲ(六〇) 喧嘩の口上

シ語尾をとるもの、一例

此様ナ阿房では揚句にハ世上仕廻方さるより外ハなし第一世間

(財産を運尽する)

シ語尾をとるもの、一例

此様ナ阿房では揚句にハ世上仕廻方さるより外ハなし第一世間

(財産を運尽する)

の人に對して申訳が立ぬといふて(五二)三反田辺の社人
 (二) その他、二例

コリヤア面白へはやしんの初ツタ(六〇) 諫早
 是りやア面白へ藪が初タ(六〇) 諫早

右の如く『一寸見た夢物語』には、「イ」語尾をとるもの八例、「キ」語尾をとるもの七例、「シ」語尾をとるもの二例、その他二例、会話文中合計十八例「カ」語尾以外の形をとるものが存する。これらを一括して表示すると次の如くなる。

語尾の種類 とするもの	語	使用者	注	同一文献中の力語尾
(イ) 語尾をとるもの	強イ	書生	相手の書生に對して	○
	ヨイ	禪僧	祭りの踊りを見物している	ヨカ
	悪イ	役人	諫早の者に對して	○
	ナイ	諫早	茶屋の亭主に對して	ナカ
	ヲット	功者	他にヲットロシイ三例	ヲットロシカ
	ロシイ	功者	連れの女に對して	○
	アシキ	功者	連れの女に對して	タカアカ
(ロ) キ語尾をとるもの	高キ	功者	連れの女に對して	○
	ヨキ	功者	連れの女に對して	ヨカ
	面白キ	在郷の人か	尊大なものの言いかた	○
	ナキ	不明	喧嘩の口上	ナカ
	遠キ	不明	喧嘩の口上	○
	近キ	不明	喧嘩の口上	○
(ハ) シ語尾をとるもの	ナシ	社人	天照大神のことばの引用	ナカ
(ニ) その他	面白へ	諫早	他に一例、共に諫早の者に對して	○

これらの語について検討すると、これら種々の語尾をとるものうちで、同一文献に「カ」語尾のあらわれるものが「よか」「なか」「たかかか」「を」とろしかの四語である。そのうちで、「よか」「なか」「たかかか」それぞれに對する他の語尾はいずれも特殊な使用であると言える。即ち、「よか」に對する「よい」は、禪僧が祭りの見物をしている佐賀者や田舎者に對して「是ハ成程ヨイ趣向ジャ」と言っていることばの中に使われている。「よき」の例は、功者が連れの女に對して「成程是もよき趣向で景氣よろしく見へます」などと言っていることばの中にみえる。いずれも、「じゃ」「ます」など中央語的な語と共に使用されており、一般庶民のことばとは相當の開きが出ている。また、「なか」に對する「ない」は、諫早者が茶屋の亭主に對して勿体ぶったことばの中に、「なき」は喧嘩の口上に、「なし」は社人が天照大神のことばを引用した中に、それぞれあらわれている。また、「たかか」に對する「たかき」は、功者が連れの女に對して言っていることばに見えるものである。右にみた如く、「カ」語尾に對する他の形は、その使用者がホフマンの言うように「少しく教育ある」高い層に属する人であるのみならず、あるいはまた勿体ぶったり、尊大な言い方であったりする場合の使用である。とにかく、普通のくだけた、日常一般に庶民が使用していたことばとは考えられないのである。ここでは「カ」語尾以外の形をとるもので、然も同一文献中に「カ」語尾があらわれる「よか」「なか」「たかか」の三語についてみたが、「カ」語尾が同一文献中にあらわれない他の用例も、右に準じて考えることができるであろう。問題として残るのが「を」とろしかに對する「を」とろしいである。この両形は、いずれも諫早の者の使用であるが、

この「をっところしい」は「をっところしか」一例に対して、四例も使用されている。役人に対して一例、佐賀者に対して二例、茶屋の亭主に対して一例、それぞれ使用しており、しかも同一人物が同じ茶屋の亭主に対して、

ヲツトロシカエヘツト高アかばん六百に負ナレ (五八) 諫早
(恐ろしい)

ヲツトロシイふてぐわつてハナ茶屋のふ (五八) 諫早
へひどい

と一例ずつ「カ」語尾と「イ」語尾を使用している。この付近の事情をいかに考えるべきか分らないが、『筑紫方言』の「言によりては」という記述と結びつけると、この語は「イ」語尾をとりやすい傾向にあったのではないかと考えられる。しかし、現在長崎県諫早地方では「カ」語尾をとっているので、速断は避けねばならない。

四

以上、形容詞「カ」語尾の使用状態について考察したが、なお他に「一寸見た夢物語」に次の如き語が一例存している。

又其上への方に 大きな 嘉瀬の焼餅ンじやリロウ (五五) 武雄有田
あるうか

この「大きな」は、武雄有田の人がたった一度使用している語である。他の個所では同一人物によって「大きな」が一例、

ヲリヨウおどんが辺の堀チウもんナテ大きな堀りよふバほって
を

(五五) 武雄有田

と使われ、他に在郷の人かと思われるが、この「大きな」(五七頁)

を一例使っている。一体、形容詞の「カ」語尾は、『一寸見た夢物語』においても、また同地あるいは隣接地域の文献にも多く使用されているのは先述の通りである。ところでこの語については、吉町先生の補注のように「大きな」の意味に解するのに従うべきであるが、そうすると、この語は現在佐賀県松浦地方や長崎県平戸島内で使用されているいわゆる形容詞「カ」語尾(例えば「静かなか」、「大きなか」)の先例となるものであろう。しかし、この語は江戸末期のみならず、江戸時代を通じて、先述の形容詞「カ」語尾をのせた文献にあらわれないし、このような用法のいわゆる形容詞の「カ」語尾もみえないので、この「カ」語尾は、当時一般的に使用されていたと考えることはできない。

五

次に、現代方言として肥筑地方では、形容詞はもちろん、漢語(いわゆる形容動詞の語幹)及び形容詞型活用の助動詞「たい・らしい」が「カ」語尾をとっているが、佐賀地方でもこれらの「カ」語尾はやはり使用されている。例えば漢語については「立派か・奇麗か・鈍か」など、既に明治三十六年に報告されている^⑬し、また「たい・らしい」についても、

カシバ キータカ サイナイトン ミズナイトン ノミタカ:
食べたい きゆなりとも

ハタバタテチャツ。オマツイラシカ
立ててある お祭り

の例など報告されており^⑭、これらの形は一般的である。これらの諸形は、いずれも形容詞「カ」語尾からの類推である事は明らかであるが、この時代には、右のような「漢語+カ語尾」は当時の文献

には全くあらわれていないので、この形は近代になってからの成立
と思われる。

また、形容詞型活用の助動詞「たい・「らしい」について、その
使用をみると、『一寸見た夢物語』では、これらが「カ」語尾をとる
ものは一例も存しない。遡って文化五年（一八〇八）刊行の『奥九
旅人井中水』においては「たか」が一例、

いんにや。時うち的事でハなか。しやんす。いつてう。抱寝つ
（巻）女

きたか。⑩

と見えているが、これ以外には全くその用例を見出すことはできな
い。しかも、この作品は、

手まへ。九州さつまがたのもんばあ。⑪

と登場人物が言っている通り、薩摩地方のことばを写しているので、
余り参考にならないとしても、とにかく一九世紀初頭このような形
をとっている用例がある事は注意を要する。このような事から、幕
末期佐賀地方で「たい・「らしい」の形容詞型活用の助動詞は「カ」
語尾をとっていた可能性は十分あるが、『一寸見た夢物語』で一例
みえている「たい」が

ドラカ彼美婦と一夜寝テ見たいノウ（五四）書生四人連れ

と「イ」語尾をとっているし、更には『伊勢道中不案内記』でも、
すべて「イ」語尾をとっている事を考えると、これら形容詞型活用
の助動詞は、いわゆる形容動詞と同様「カ」語尾をとる事は殆んど
なかったと思われる。

六

以上要するに、「カ」語尾が現代と全く同様に、形容詞の終止形。

連体形「イ」語尾の代りに、佐賀藩内の各地で自由に使用されて
いた。その他の形も使用されていたが、それらは一般的でない。な
お、この「カ」語尾は現在、いわゆる形容動詞の語幹や形容詞型活
用の助動詞の終止形・連体形語尾としても使用されているが、幕末
期にはまだそのような使用はみられず、この「カ」語尾はもっぱら
形容詞の語尾としてのみ使用されていたのである。

（注）

① 滑稽洒落一寸見た夢物語 吉町義雄（『文学研究』五二輯四八
頁）

② 同右書四七頁

③ 注①書参照

④ 幕末期佐賀地方の動詞（『言語生活』一一一八号）

——滑稽洒落一寸見た夢物語を中心に——

幕末期佐賀地方の助詞（『語文研究』一五号）

——滑稽洒落一寸見た夢物語を中心に——

幕末期佐賀地方に於ける文末助詞（『解釈』八巻四号）

——滑稽洒落一寸見た夢物語を中心に——

⑤ 伊勢道中不案内記につき 東条操（『佐々木信綱博士還暦
記念論文集 日本文学論叢』参照）

⑥ 『国語学大系 第二十巻』所収『筑紫方言』一五〇頁

⑦ ラナルド・マクドナルドの『日英語彙』吉町義雄（『方言』二
巻五号）

⑧ 九州方言の特異性（一）吉町義雄（『九大国文学』一号七〇頁）

⑨ ロニの日本国訛考 吉町義雄（『国語学』五輯一〇二頁）

⑩ 『東語簡要』抄 吉町義雄（『方言』昭和七年十一月号六二頁）

⑪ 五十年前の長崎方言文獻——

- ⑫ 注⑨書参照
- ⑬ 柳川方言 洵河沙一撮 岩淵悦太郎 (『方言』昭和八年二月号
一三四頁)
- ⑭ 同右書一三六頁
- ⑮ 清水平一郎 『佐賀県方言語典一斑』三七頁
- ⑯ 佐賀県藤津郡久間村地方方言 小田寛次郎 (『方言誌』一四輯
七五頁)
- ⑰ 皇都書林刊『奥九旅人井中水 上』九丁ウ
- ⑱ 同右書一七丁オ〜ウ

(篠崎久躬)